

# 『異国牒状記』所載の「牒状」について

## —「文武天皇慶雲二年」の「牒状」の解釈を中心として—

窪田 藍

### はじめに

本稿で取り上げる『異国牒状記』<sup>(1)</sup>（以下、『牒状記』）は、貞治6年（1367）に、和寇禁遏を求めて来日した高麗使（金龍ら）ならびにそのもたらした牒状への対応について議論が重ねられた際に作成された文書である。その内容は、中国（隋・唐・宋・元）や朝鮮（高句麗・新羅・高麗）から送られてきた文書（「牒状」<sup>(2)</sup>）に朝廷・幕府がどのように対応したかの先例が書かれたものである。その存在は早くから知られ、20世紀初頭には和田英松氏<sup>(3)</sup>により翻刻・解説がされている。その後、『大日本史料』<sup>(4)</sup>等にも収録されており<sup>(5)</sup>、『牒状記』に記載されている先例は、多くの外交史研究や対外関係史関連の年表等において有効な史料として取り扱われている<sup>(6)</sup>。さらに近年、石井正敏氏が『牒状記』の諸写本を校訂し、改めて翻刻・釈文の作成を行い、その成立過程や作者等の基礎的な研究を発表された<sup>(7)</sup>。

石井氏によれば、『牒状記』の書きぶりは先例を勘え調べて上申する文書である勘例に類似するが、勘例が通常は漢文であるのに対して、仮名書きであることなどから、勘例そのものではなく、勘例を基にして、今回の高麗状への対応の指針を主眼として作成された文書であるとされる。なお、この時の高麗使来日と牒状対応審議については、諸史料からうかがい知ることができる（表1）。表1の月日の網掛け部分により、（局務）大外記中原師茂と官務小槻兼治が勘例を作成したことが分かる。5月9日には中原師茂が二条良基に勘例を送っており、この勘例の写しが『師守記』貞治六年五月九日条に引用（以下、師茂勘例）され、その内容が分かるが、この内容と『牒状記』を比較すると先例引用の年月日に大きな差異があるため、この勘例を参考にしてはと考えられず、官務小槻兼治の勘例を参考に書かれたと石井氏は指摘している。

また、写本については前田育徳会尊経閣文庫所蔵本（前田本）<sup>(8)</sup>・東京大学図書館所蔵本（東大本）<sup>(9)</sup>・京都大学図書館所蔵本（京大本）<sup>(10)</sup>が知られているが、翻刻に際して三者の校異と諸写本間の関係の整理を行われたのは石井論文のみである。従って、本稿で引用する『牒状記』本文は石井論文の釈文に依拠する。

以上のように、石井氏が『牒状記』の詳細を明らかにされたことによって、その史料価値が高まり、今後の研究で『牒状記』を取り扱う際に非常に参考になる。しかしながら、石井論文は

表1 貞治6年勘申の過程

年月日	事項		出典史料
貞治 5 年 (1366)	9 月	これより先、高麗、金龍らを遣わし、禁賊を求める	高麗史
貞治 6 年 (1367)	2月14日	高麗使金龍ら、摂津兵庫にいたり、書を通ず。	善隣
	この月	高麗使、入朝。和寇禁圧を要請。	愚昧
	3月16日	武家、異国牒状の沙汰につき公家に伝える。牒状を武家が執り進むべきか、公家が召すべきかその方法について尋ねる。	深心
	4月23日	別当柳原忠光、大外記中原師茂に、異国牒状勘例を紛失してしまったので、今夕のうちに今一本の進上を求める。師茂、承知の由を返事。	師守
	4月24日	前内大臣三条公忠、異国仗議・殿上定の先例注進を師茂に求める。また、勘例を求める。師茂、調べて注進すべきことを約す。この日、師守・師香ら先例を調べて師茂に提出。	師守
	4月25日	師茂、異国牒状勘例を重ねて清書し、柳原忠光に送る。	師守
	4月26日	師茂、万里小路嗣房に文永仗議定文を送る。ついでに勅問・人々の意見などについて尋ねる。嗣房より受領の返事あり。御点人数が伝えられる。	師守
	4月28日	殿上定、延期。	師守
	5月 8 日	関白二条良基、仮名書状を以て師茂に、異国牒状無礼時の先例注進を求める。	師守
	5月 9 日	師茂、二条良基に書状ならびに「異国牒状到来時、被略返牒、或將軍以下遣例事」と題する勘例を送る。→師茂勘例	師守
	5月10日	二条良基、家尹の奉書を以て師茂に異国殿上定の先例を尋ねる。師茂、永保二年以下の例を注進。	師守
	5月13日	柳原忠光、異国牒状事について前関白近衛道嗣に相談。	深心
	5月15日	殿上定、十九日に延期。	師守
	5月16日	参議日野保光、師茂に殿上定の先例を尋ねる。師茂、永保二年等の先例を注進。	師守
	5月19日	異国殿上定、延期。	師守
	5月20日	師茂、異国牒状に対する諸卿の意見書を卜部兼熙より借りる。翌日返却。	師守
	5月22日	近衛道嗣、師茂を召し、勘例の事などを仰す。	深心
		師茂、「異国牒状無返牒例小草子」を進上。	師守
	5月23日	近衛道嗣、「異国牒状無返牒例小草子」を返却。	師守
		今夜異国殿上定。官・外記勘例ならびに牒状を下さる。牒状は読み上げたが、勘例披見には及ばず。牒状無礼により返牒せずと決す。	深心・愚昧・師守
	5月26日	柳原忠光、近衛道嗣を訪ね、殿上定の詳細を語る。	深心
このころ、忠光、三条公忠に書状を以て殿上定の詳細を伝える。		愚昧	
5月27日	師茂、二条良基に先日「異国牒状事勘例草」を返してもらう。	師守	
5月28日	師茂、書状を頭弁嗣房に送り、二十三日の殿上定の子細を尋ね、官務小槻兼治勘例の借用を求める。勘返状ならびに兼治勘例が届く。師茂、兼治勘例を写し、返却。また師茂、局務勘例を三条光忠に貸す。本意の由、返事あり。	師守	
6月 2 日	師茂、卜部兼熙より官務勘例を借りるが、先日(五月二十八日)頭弁より借りたものと同じなので、書写せずに返すこととする。	師守	
6月 4 日	師茂、卜部兼熙に官務勘例を返す。ついでに局務勘例を貸す。	師守	
6月 7 日	卜部兼熙、異国殿上定における諸卿意見の奉行職事案写を師茂に送り、かつ局務勘例を返す。	師守	
	この日、足利義詮、春屋妙葩に書を送り、僧録の名による高麗への返書作成を命じる。	鹿王院文書	
6月13日	近衛道嗣、「異国牒状勘例草、可有御一見之由」を師茂に伝える。師茂、「異国牒状勘例草」を進上する。	師守	
6月26日	高麗使、帰途につく。幕府、返牒を与え、物を賜う。	愚昧・善隣	
	この後、金龍ら征夷大將軍の禁約を得て本国に帰着。	高麗	

【凡例】高麗：『高麗史』 師守：『師守記』 善隣：『善隣国宝記』 愚昧：『後愚昧記』 深心：『後深心院関白記』

\* 本表は、石井正敏「『異国牒状記』の基礎的研究」(『紀要』史学54(中央大学文学部)2009)掲載の表をもとに加筆・改訂したものである。

『牒状記』の校訂やその成立に重点を置いたため、『牒状記』に先例としてあげられる「牒状」の個々の内容については、いくつか問題点を指摘されるのみで、詳しく触れられていない。そこで、本稿では『牒状記』に掲載されている「牒状」について、他の諸史料で確認できるか否か、確認できるとすればどの事項に該当するのか、またそれらの諸史料との比較を通して、『牒状記』所載の「牒状」が何を典拠として書かれたのかを検討したい。さらに、『牒状記』にあげられている「文武天皇慶雲二年」の「牒状」について、『対外関係史総合年表』<sup>(11)</sup>（以下、『総合年表』）では養老2年に唐からもたらされた国書である扱いになっているが、補注等によって説明がなされていない。従ってこの「牒状」に着目して、その肯否について検討する。

## 1 『牒状記』所載「牒状」と諸史料との比較と典拠

### （1）『牒状記』所載「牒状」と諸史料との比較

本節では『牒状記』に掲載されている「牒状」について、他の諸史料で確認できるか否か、確認できるとすればどの事項に該当するのかを確認したい。『牒状記』の所載の「牒状」が、他の諸史料によって、どの事項にあたるかを推定し、一覧にしたものが表2である。『牒状記』の「牒状」の先例は、「代々異国よりの礼節の事」（以下、返牒なしの先例）と「返牒なき時宣旨をくたし大宰府の返牒」（以下、大宰府返牒の例）に分けて記載されているが、表2では両者を一括して年代順に記載している。そのため、引用年月左側に、返牒なしの先例に×、大宰府返牒の例に○を付して両者を区別している。また「牒状」の冒頭部分が記載されている場合は、「牒状文面」の項に記載し、〈返〉とあるのは、返牒の文面である。「他の出典史料」は、年月や『牒状記』の内容などから、他史料における同一事項であろうと、推定したものである。

この表を見ると、ほとんどの「牒状」について、他史料でもそのもたらされた事情が確認できる。本来ならば一例ずつ確認していくべきであるが、紙面の都合上、本稿の目的の一つである、「牒状」の典拠を明らかにするために検討を要する部分に関して以下論じていく。

### （A）推古2年（594）正月（表2 No.2）・同16年（608）8月（表2 No.3）の例

最初に『牒状記』当該部本文を抜き出し、次に表2の「他の出典史料」に該当する部分を抜粋した。

#### 史料1 『牒状記』<sup>(12)</sup>（下線は筆者による。以下同じ。）

推古天皇二年正月、異朝隋国の牒状到来。その文にはく、「皇帝和王に問フ」。聖徳太子此状を御覧じて、天子と書カずして和王と書ける事を憎みてその使を賞せず。

同十六年八月、又異朝隋の煬帝の書にはく、「皇帝和王に問ふ」と書く。無礼なりと雖も返牒を遣はしていわく、「東天王西皇帝に申す」と書かる。隋ノ煬帝これを見て悦ばずと云々。

#### 史料2 『書紀』推古十六年八月壬子条

壬子、召唐客於朝廷、令奏使旨。時阿倍鳥臣・物部依網連抱、二人為客之導者也。

表2 『異国牒状記』所載「牒状」と諸史料との比較

No.	引用年月	発信元	「牒状」文面	他の出典史料	備考
1	× 応神28年9月	高句麗	高麗の王日本国に教ふ	『日本書紀』 応神28/9・師茂勘例	
2	× 推古2年(594)正月	隋	皇帝和王に問フ	師安勘例か?	同一牒の可能性が高い。
3	× 推古16年(608)8月	隋	皇帝和王に問ふ 〈返〉東天王西皇帝に申ス	『日本書紀』 推古16/8/12, 同年9/11・『隋書』東夷伝倭国・ 『元興寺伽藍縁起』・『聖徳太子伝暦』下・師安勘例	
4	× 斉明7年(661)	高句麗	大高麗国天皇謹白大和国 天皇に	『日本書紀』 斉明6/1/1, 5/8, 7/16か?	斉明6/1/1高句麗使相賀取文ら100人余筑紫に来着。5/8難波館着。7/16帰国。この高句麗使のことか?ただし、国書を持ってきたという記載はなし。 「斉明7年」を重視するならば、高句麗ではないが、斉明7/4に百済の鬼室福信が遣使して表を上る、という記事が見られる。また、同年12月には「高麗言」として、高句麗と唐の戦いの様子が述べられているので、斉明7年にも高句麗使が来ていた可能性もあるか? いずれにしても、当該国書の文面の典拠は不明。
5	× 天智10年(671)	唐カ	大唐皇帝敬問日本国天皇 に	『日本書紀』 天智10/11/10・菅原勘例	同一牒の可能性が高い
6	× 天武元年2月(672)	唐	大唐皇帝敬て和王に問	『日本書紀』 天武元/3/21・菅原勘例	
7	× 文武天皇慶雲2年(705)	唐	皇帝書を日本国の王に致す	『続日本紀』 養老2/12/15?・菅原勘例?	養老2年の誤りか?〔総合年表〕
8	○ 延喜7年(907)5月	新羅	記載無し	『扶桑略記』 延長7/5/17, 21?	延長7年の誤りか?〔石井氏註(7)論文〕
9	× 長徳3年(997)5月	高麗	記載無し	『小右記』 長徳3/6/12, 13・『水左記』 承暦4/9/4・『帥記』 承暦4/9/2・『百練抄』 長徳3/6/13・師茂勘例 長徳3/6/13	『水左記』『帥記』は、承暦4年に、長徳3年の例を引いている。
10	○ 寛仁3年(1019)9月	高麗	記載無し	『小右記』 寛仁3/9/19, 22, 23, 24・『左経記』 寛仁3/9/22・『日本紀略』 寛仁3/9/22	
11	○ 永承6年(1051)7月	高麗	記載無し	『水左記』 承暦4/9/4・『百練抄』 永承6/7/10	
12	× 承暦4年(1080)9月 ○	太宗(宋)国明州	太宗(宋)国明州牒日本国 大宰府	(宋関連史料)『水左記』 承暦4/⑧/26, 30, 9/10・『帥記』 承暦4/⑧/26, 9/10・『扶桑略記』 承暦4/⑧/30, 9/9・菅原勘例 (高麗関連史料)『朝野群載』 20異国 己未年11月日付高麗国来賓省牒,『水左記』 承暦4/9/4・『帥記』 承暦4/9/2, 師茂勘例 承暦4/10/2・『水左記』『本朝統文粹』 11『朝野群載』 20 11/3	同年にもたらされた高麗牒との混同が見られる〔石井氏註(7)論文〕。

No.	引用年月	発信元	「牒状」文面	他の出典史料	備考
13	○ 承徳元年 (1097)5月	大宋国明州	記載無し	師茂勘例 承徳元/9, 12/24	同一牒の可能性が高い。また、『牒状記』の○部分と師茂勘例12/24部分がほぼ同文である。
14	× 承徳元年 (1097)9月		記載無し		
15	× 元永元年 (1118)9月	宋（明州）	知明州軍州事	『中右記』元永元/6/8, 『百練抄』元永元6/8・師茂勘例 永久5(1117)/9, 永久6(=元永元)/3/15, 6/8・『善隣国宝記』推古15, 天智3, 天平勝宝6, 元永元年条	『牒状記』が「元永元年九月」としているのは、師茂勘例に牒状到来が永久5年9月のこととしているので、年と月を混同したか？
16	○ 承安3年 (1173)2月	大宋国明州	〈返〉日本国沙門静海牒	『玉葉』承安2/9/22, 承安3/3/13・『百練抄』承安3/3/3・師茂勘例承安2秋, 承安3/2	
17	× 天福2年 (1234)正月	高麗？	記載無し	『吾妻鏡』貞永元(1232)/⑨/17か？	同一牒の可能性が高い。現存史料の直近の出来事として、鏡社住人による高麗への夜打事件と関連する可能性を指摘。 [近藤氏註(6)論文]
18	○ 天福2年 (1234)5月		記載無し		
19	× 仁治元年 ○ (1240)4月	高麗カ	記載無し	『平戸記』仁治元/4/12～14・『百練抄』仁治元/4/3・『帝王編年記』仁治元/4/3	「直廬」という場所が一致する。
20	× 文永5年 (1268)2月	蒙古カ	記載無し	『深心院関白記』文永5/2/19, 3/27・「蒙古牒状奥書」(『調伏異朝怨敵抄』)・師茂勘例文永5/①/8, 2/6, 2/28, 3/27	「蒙古牒状奥書」には2月に返牒をしない事を決した旨が書かれているが、その後も返牒について評議している。
21	× 文永6年 (1269)12月	蒙古カ	記載無し	『本朝文集』67文永7/1付牒状・『蒙古信使覚書』・『五代帝王物語』文永5/10/17・『元史』日本伝 至元6/6・師茂勘例文永6/4/26	
22	× 文永8年 (1271)10月	元カ	記載無し	『東福寺文書』・『吉統記』文永 8 /10/24・『元史』159張良弼, 208日本	
23	× 建治元年 (1275)5月 同10月 弘安2年 (1279)7月	(建治元年) 元カ  (弘安元年) 宋(降臣)カ	記載無し	(建治元年)『鎌倉年代記』裏書 建治元/9/7・『関東評定伝』建治元/9/7・『帝王編年記』建治元/9/6  (弘安2年)『勘仲記』弘安2/7/25・師茂勘例 弘安2/6/26, 7/25	『牒状記』の「建治元年五月」「同年十月」、他史料と月が合わず。師茂勘例に「十月廿二日別当経任卿為院御使参□(拱)政殿下、被進今度関東 奏聞蒙古国去夏比到着牒状等」とあり、『牒状記』の「建治元年十月」は師茂勘例の記述と対応しているか。また、師茂勘例「去夏」の部分が『牒状記』の建治元年五月と対応するか。
24	× 正応5年 (1292)12月	高麗	記載無し	細川護立氏所蔵文書(『鎌倉遺文』)・師茂勘例 正応5/11/12, 12/8, *10?, 16, 正応6/4/22	*細川護立氏所蔵文書の記述と一致することによって推定

×返牒なしの先例 ○大宰府返牒の例  
閏月は「①」等で記載した

師茂勘例：『師守記』貞治6年5月9日所引中原師茂勘例

師安勘例：『善隣国宝記』推古15年条所引元永元年（1118）4月25日の中原朝臣師安・同氏広忠・清原真人信俊・中原朝臣師遠・同氏広宗による勘例

菅原勘例：『善隣国宝記』元永元年条所引菅原在良勘例

於是、大唐之國信物置<sub>二</sub>於庭中<sub>一</sub>。時使主裴世清、親持<sub>レ</sub>書、兩度再拜、言<sub>三</sub>上使旨<sub>一</sub>而立之。其書曰、皇帝問<sub>二</sub>倭皇<sub>一</sub>。使人長吏大禮蘇因高等、至具懷。朕欽承<sub>二</sub>宝命<sub>一</sub>、臨<sub>二</sub>仰区宇<sub>一</sub>。思<sub>下</sub>弘<sub>二</sub>德化<sub>一</sub>、覃<sub>二</sub>被含靈<sub>上</sub>。愛育之情、無<sub>レ</sub>隔<sub>二</sub>遐邇<sub>一</sub>。知<sub>下</sub>皇介<sub>二</sub>居海表<sub>一</sub>、撫<sub>二</sub>寧民庶<sub>一</sub>、境內安樂、風俗融和<sub>上</sub>。深氣至誠、遠脩<sub>二</sub>朝貢<sub>一</sub>。丹款之美、朕有<sub>レ</sub>嘉焉。稍暄。比如<sub>二</sub>常也<sub>一</sub>。故遣<sub>二</sub>鴻臚寺掌客裴世清等<sub>一</sub>、稍宣<sub>二</sub>往意<sub>一</sub>。并送<sub>レ</sub>物如<sub>レ</sub>別。時阿倍臣出<sub>レ</sub>庭、以受<sub>二</sub>其書<sub>一</sub>而進行。大伴嚙連、迎出承<sub>レ</sub>書、置<sub>二</sub>於大門前机<sub>一</sub>上而奏之。事畢而退焉。(下略)

### 史料3『書紀』同年九月辛巳条

辛巳、唐客裴世清罷歸。則復以<sub>二</sub>小野妹子臣<sub>一</sub>為<sub>二</sub>大使<sub>一</sub>。吉士雄成為<sub>二</sub>小使<sub>一</sub>。福利為<sub>二</sub>通事<sub>一</sub>。副<sub>二</sub>于唐客<sub>一</sub>而遣之。爰天皇聘<sub>二</sub>唐帝<sub>一</sub>。其辞曰、東天皇敬白<sub>二</sub>西皇帝<sub>一</sub>。使人鴻臚寺掌客裴世清等至、久憶方解。季秋薄冷。尊何如。想清愈。此即如<sub>レ</sub>常。今遣<sub>二</sub>大禮蘇因高・大禮乎那利等<sub>一</sub>往。謹白不<sub>レ</sub>具。(下略)

### 史料4『隋書』東夷伝倭国

大業三年、其王多利思比孤遣<sub>レ</sub>使朝貢。(中略)其國書曰、日出處天子致<sub>二</sub>書日沒處天子<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>恙云云。帝覽<sub>二</sub>之不<sub>レ</sub>悅<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>鴻臚卿<sub>一</sub>曰、蠻夷書有<sub>二</sub>無禮者<sub>一</sub>、勿<sub>二</sub>復以聞<sub>一</sub>。明年、上遣<sub>二</sub>文林郎裴清<sub>一</sub>使<sub>二</sub>於倭國<sub>一</sub>。(中略)倭王遣<sub>二</sub>小德阿輩臺<sub>一</sub>、從<sub>二</sub>數百人<sub>一</sub>、設<sub>二</sub>儀仗<sub>一</sub>、鳴<sub>二</sub>鼓角<sub>一</sub>來迎。後十日、又遣<sub>二</sub>大禮哥多毗<sub>一</sub>、從<sub>二</sub>二百餘騎<sub>一</sub>郊勞。既至<sub>二</sub>彼都<sub>一</sub>、其王與<sub>二</sub>清相見<sub>一</sub>、大悅曰。(中略)於<sub>レ</sub>是設<sub>二</sub>宴享<sub>一</sub>以遣<sub>二</sub>清<sub>一</sub>、復令<sub>二</sub>使者隨<sub>二</sub>清來貢<sub>一</sub>方物。此後遂絕。

### 史料5『元興寺伽藍縁起』

(上略)歲次戊辰、大<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>國使主鴻臚寺掌客裴世清<sub>一</sub>、使副尚書祠部主事遍光高等來奉之、(下略)

### 史料6『聖徳太子伝暦』下

(推古十六年)秋八月。大隋使客入<sub>レ</sub>京。詔遣<sub>二</sub>飾騎七十五疋<sub>一</sub>。迎<sub>二</sub>椿市之街<sub>一</sub>。太子微服而看。世清遙睨<sub>二</sub>太子所居林<sub>上</sub>。語<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>曰。彼有<sub>二</sub>真人之氣<sub>一</sub>。經<sub>二</sub>其林下<sub>一</sub>々々馬揖去。觀者異<sub>レ</sub>之。隋帝書曰。皇帝問<sub>二</sub>倭皇<sub>一</sub>。使人長吏大禮蘇因高等至具<sub>レ</sub>懷〈云云〉。天皇問<sub>二</sub>太子<sub>一</sub>曰。此書如何。太子奏曰。天子賜<sub>二</sub>諸侯王<sub>一</sub>書式也。然皇帝之字。天下一耳。而用<sub>二</sub>倭皇字<sub>一</sub>。彼有<sub>二</sub>其礼<sub>一</sub>。応<sub>二</sub>恭而修<sub>一</sub>。天皇善<sub>レ</sub>之。九月。隋客還<sub>二</sub>国<sub>一</sub>。復以<sub>二</sub>妹子<sub>一</sub>為<sub>二</sub>大使<sub>一</sub>。吉志雄成為<sub>二</sub>少使<sub>一</sub>。天皇召<sub>二</sub>太子已下<sub>一</sub>。而議<sub>二</sub>答書之辞<sub>一</sub>。太子握<sub>二</sub>筆書<sub>レ</sub>之曰。東天皇敬問<sub>二</sub>西皇帝<sub>一</sub>〈云云〉。謹白不具。(下略)

『牒狀記』推古16年8月の例は、日本側の史料に見える最初の遣隋使として有名で、史料2～6の各史料に見ることができる。一方推古2年正月の「牒狀」は、『書紀』や『隋書』等の正史に一切見いだせない。ここで注目できるのが以下の史料である。



## 史料7『善隣国宝記』巻上 推古15年条所引師安勘例

(上略) 就中、元永元年四月廿五日、中原朝臣師安・同氏広忠・清原真人信俊・中原朝臣師遠・同氏広宗五人、同引<sup>(配)</sup>日本書記内推古記<sup>(配)</sup>、又引<sup>(配)</sup>経籍後伝記<sup>(配)</sup>曰、以小治田朝〈今按推古天皇〉、十二年歳次甲子正月朔、始用<sup>(配)</sup>曆日<sup>(配)</sup>、是時、国家書籍未<sup>(配)</sup>多、爰遣<sup>(配)</sup>小野臣因高<sup>(配)</sup>於隋国<sup>(配)</sup>、買<sup>(配)</sup>求書籍<sup>(配)</sup>、兼聘<sup>(配)</sup>隋太子<sup>(配)</sup>、其書曰、日出処天子致<sup>(配)</sup>書日没処天子<sup>(配)</sup>無<sup>(配)</sup>恙云云。帝覽<sup>(配)</sup>之<sup>(配)</sup>不<sup>(配)</sup>悦、猶怪<sup>(配)</sup>其意氣高遠<sup>(配)</sup>、遣<sup>(配)</sup>裴世清等十三人<sup>(配)</sup>、送<sup>(配)</sup>因高<sup>(配)</sup>、來觀<sup>(配)</sup>国風<sup>(配)</sup>、其書曰、皇帝、問<sup>(配)</sup>倭王<sup>(配)</sup>、聖徳太子甚惡<sup>(配)</sup>其黜<sup>(配)</sup>天子之号<sup>(配)</sup>、為<sup>(配)</sup>中倭王<sup>(配)</sup>、而不<sup>(配)</sup>賞<sup>(配)</sup>其使<sup>(配)</sup>、仍報書曰、東天皇、白<sup>(配)</sup>西皇帝<sup>(配)</sup>、〈云云〉、(下略)

これは15世紀成立の『善隣国宝記』推古15年条に引用された、元永元年(1118)4月25日の明経博士中原朝臣師安・同氏広忠・清原真人信俊・中原朝臣師遠・同氏広宗の五人による勘例(以下、師安勘例)である。この師安勘例の中に『経籍後伝記』という書物の文を引いており、下線部の文章が『牒状記』の推古2年・16年の記載とほぼ同じであることが指摘されている<sup>(13)</sup>。この部分を『牒状記』の推古2・16年部分と改めて比較すると、「仍報書曰…」以前と『牒状記』推古2年の「その文にいはく、「皇帝和王に問フ」。聖徳太子此状を御覧じて、天子と書かずして和王と書ける事を憎みてその使を賞せず。」という記述がほぼ同じである。推古16年部分に関しては、『書紀』をはじめとする諸史料の記述とも大方一致するが、『牒状記』の「無礼なりと雖も返牒を遣はして」という記述は他の史料には見られない。さらに言えば、『聖徳太子伝暦』は隋からの国書に対する聖徳太子の意見を(史料6二重下線部)記述しているが、「而用<sup>(配)</sup>倭皇字<sup>(配)</sup>。彼有<sup>(配)</sup>其礼<sup>(配)</sup>。」とあるように、「倭皇」の字に「皇」の字を用いていることに対して「礼がある」と評価しており、「無礼なり」という『牒状記』とはいささか異なる評価となっている。一方、『牒状記』・師安勘例には「和(倭)王」と記しており、「王」と書いていることについて「無礼である」と評価している。ちなみに、史料2の『書紀』も「倭皇」と記している。従って、『牒状記』は『書紀』や『聖徳太子伝暦』とは別のものを典拠としており、師安勘例、もしくは『経籍後伝記』の「聖徳太子甚惡<sup>(配)</sup>其黜<sup>(配)</sup>天子之号<sup>(配)</sup>、為<sup>(配)</sup>中倭王<sup>(配)</sup>、而不<sup>(配)</sup>賞<sup>(配)</sup>其使<sup>(配)</sup>、」という記載を踏まえていると考えられる。

以上により、『牒状記』の推古2年の部分は、「十二歳(年)・・・正月」の「十」の部分落としているものの、師安勘例、もしくは『経籍後伝記』を参照して「推古二年正月」とした可能性が高い。実際には「十二年歳次甲子正月朔、始用<sup>(配)</sup>曆日<sup>(配)</sup>」とあるごとく、推古12年には暦をはじめて用いたのであって<sup>(14)</sup>、隋に使を派遣したのではない。しかし、『善隣国宝記』の著者である瑞溪周鳳が「推古紀」と「太子伝」には妹子の入隋が推古15年とあるのに、『経籍後伝記』には推古12年とあることに疑問を抱いており、『経籍後伝記』の記述を妹子の入隋記事として誤解している。<sup>(15)</sup>『牒状記』の記載も同様の誤解から、1回の遣使を2回のこととしたのであろう。

また、師安勘例には「推古十六年八月」という記述が見られないにも関わらず『牒状記』に「推古十六年八月」の記載があるのは、『書紀』『隋書』をはじめとした正史に記載された事実を認識していたためであろうが、上述した理由から実際に『書紀』を典拠としたとは考えられず、直接的には師安勘例、もしくは『経籍後伝記』を踏まえて記述された蓋然性が高い。

(B) 天智10年(表2 No.5)・天武元年2月(表2 No.6)の例

史料8『牒状記』

天智十年牒状到来。その書にいはく、「大唐皇帝敬問日本国天皇に」。礼節は子細なしと雖も、返牒はなし。

天武天皇元年二月、唐牒状の函の上に題して云ク、「大唐皇帝敬て和王に問」と書く。返牒なし。

ここで注目したいのは、『善隣国宝記』元永元年条の記載である。元永元年4月27日の菅原在良の勘文(以下、菅原勘例)が引用されており、菅原勘例にも天智10年・天武元年の先例が記載されているので、以下に抜き出してみる。

史料9『善隣国宝記』巻上 元永元年条所引菅原勘例

天智天皇十年、唐客郭務棕等来聘、書曰、大唐帝敬問日本国天皇、〈云云〉、天武天皇元年、郭務棕等来、安置大津館、客上書函題曰、大唐皇帝敬問倭王書

『牒状記』と菅原勘例所引の書の内容がほぼ同文であることがわかる。また、菅原勘例によれば、天智10年・天武元年両方に郭務棕が関連していることになる。この時の郭務棕の動きを『書紀』から抜き出すと以下のようである。

史料10『書紀』天智十年十一月癸卯条

十一月甲午朔癸卯、対馬国司、遣使於筑紫大宰府言、月生二日、沙門道久・筑紫君薩野馬・韓嶋勝娑婆・布師首磐、四人、從唐来曰、唐国使人郭務棕等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、総合二千人、乗船卅七隻、俱泊於比知島、相謂之曰、今吾輩人船数衆。忽然到彼、恐彼防人、驚駭射戰。乃遣道久等、預稍披陳来朝之意。

対馬国司が大宰府に、郭務棕等600人、送使沙宅孫登等1400人の計2000人がやってきたことを報告する。『牒状記』天智10年はこの記事に該当するものであろう。

史料11『書紀』天武元年三月己酉条

元年春三月壬辰朔己酉、遣内小七位阿曇連稻敷於筑紫、告天皇喪於郭務棕等。於是、郭務棕等、咸着喪服、三遍举哀。向東稽首。

昨年(天智10)12月に天智が崩御したことを受けて、筑紫に滞在する郭務棕に天智の喪を伝える。

史料12『書紀』同月壬子条

壬子、郭務棕等再拜、進書函與信物。



郭務棕等、書函と信物を進める。『牒状記』「天武天皇元年二月」の「牒状」はこの事項に対応すると考えられる。

#### 史料13『書紀』同年五月壬寅条

夏五月辛卯朔壬寅、以<sub>レ</sub>甲冑弓矢<sub>一</sub>、賜<sub>レ</sub>郭務棕等<sub>一</sub>。是日、賜<sub>レ</sub>郭務棕等物<sub>一</sub>、総合絶一千六百七十三匹・布二千八百五十二端・綿六百六十六斤。

郭務棕等に甲冑・矢・布類を賜う。

#### 史料14『書紀』同月庚申条

庚申、郭務棕等罷歸。

郭務棕等、帰国する。

史料12の「書函」は『牒状記』・菅原勘例にみえる「天武天皇元年」の「唐牒状の函」(『牒状記』)・「上書函」(菅原勘例)と対応していると考えられる。天智10年は、郭務棕がやって来た、との記述があるのみで、書函については記載がない。先行研究によれば、天智10年の書函と天武元年の書函は同一のものとする説<sup>(16)</sup>と二通とする説<sup>(17)</sup>があり、現在は同一のものとする説が有力である。両者の違いは、同一書の別々の表現であり、「日本国天皇」は後世の潤色が加わっており、本来は「倭王」であったと解釈されている<sup>(18)</sup>

『書紀』には見えない国書の函書きが菅原勘例と『牒状記』に記載されていることと、菅原勘例の潤色が『牒状記』に反映されていることから、この部分についても、元永元年の勘例に基づいていると考えられる。

(C) 承暦4年(1080)9月(表No.12)

#### 史料15『牒状記』

承暦4年の例は、返牒なしの先例・大宰府返牒の例両方に記載がある。

(返牒なしの先例) 承暦四年九月、(a)<sup>(大宋)</sup>太宗国明州牒状越前国敦賀の津につく。その状にいはく、「<sup>(宋)</sup>太宗国明州牒日本国大宰府」と書く。(b)諸道の輩に仰せて勘へらるる処に、牒状の牒、先例に叶はず、猥りに聖旨と称す。蕃礼に背くとて、京都に達シ難き由、宰府の返牒を遣はす。

(大宰府返牒の例) 承暦四年九月、宰府の返牒を遣はす〈子細右に注す〉。

承暦4年に宋から牒状がもたらされたことは、以下の史料に確認できる。

#### 史料16『水左記』承暦四年閏八月二十六日・同月三十日・九月十日条

廿六日乙酉(中略)被<sub>レ</sub>下<sub>一</sub>越前国解<sub>一</sub>。〈大宋国使黄逢隨身牒状参着了。副<sub>一</sub>牒状案等<sub>一</sub>。〉仰

云、大宋人黄逢隨身牒状来<sub>三</sub>着太宰府<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>幾程<sub>一</sub>解<sub>レ</sub>纜飛帆、又来<sub>三</sub>着越前国<sub>一</sub>。件牒状直自<sub>二</sub>彼国<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>傳進<sub>一</sub>歟。尚追<sub>二</sub>遣太宰府<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>彼<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>進歟<sub>一</sub>如何者。諸卿定申云、追<sub>二</sub>遣太宰府<sub>一</sub>之後令<sub>二</sub>進<sub>一</sub>牒状<sub>一</sub>者、往反之間定及明春歟。於<sub>二</sub>牒状<sub>一</sub>者令<sub>二</sub><sup>越前</sup><sub>一</sub>国司<sub>一</sub>取進、至于黄逢者返<sub>二</sub>遣彼府<sub>一</sub>。或亦相分<sub>二</sub>定申旨具見<sub>一</sub>定文<sub>一</sub>。右兵衛督俊実書定文也。(下略)

卅日己丑(中略)此日去廿六日定<sub>二</sub>申越前国司申大宋国牒状事<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>彼国<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>進<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>云々、於黄逢身者追<sub>二</sub>遣太宰府<sub>一</sub>云云。(下略)

(九月)十日己亥(中略)又大宋牒今朝奏聞了。別<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>侍歟<sub>一</sub>。只孫忠遲<sub>二</sub>歸来<sub>一</sub>也者。(下略)

#### 史料17『帥記』承暦四年閏八月二十六日・九月十日条

廿六日乙酉(中略)越前国司言上存<sub>二</sub>問孫忠日記<sub>一</sub>。仰云、大宋国牒状者自<sub>二</sub>越前<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>召上<sub>一</sub>歟、猶返<sub>二</sub>遣太宰府<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>彼<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>召見<sub>一</sub>歟。(下略)

(九月)十日己亥(中略)令<sub>二</sub>見<sub>一</sub>越前唐人持来牒状<sub>一</sub>、其状無<sub>二</sub>指事<sub>一</sub>、只前使孫忠遲<sub>二</sub>歸来<sub>一</sub>心也。(下略)

#### 史料18『扶桑略記』承暦四年閏八月三十日・九月九日条

閏八月卅日大宋国商人孫吉忠賚<sub>二</sub>明州牒<sub>一</sub>。参<sub>二</sub>着越前国敦賀津<sub>一</sub>。先<sub>レ</sub>是。去八月着<sub>二</sub>太宰岸<sub>一</sub>。随則府司言上。不<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>報文<sub>一</sub>。吉忠小舟飛帆参入也。仍今日差<sub>二</sub>遣官使<sub>一</sub>。所<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>件牒<sub>一</sub>也。

九月九日戊戌。宋朝牒書到来。奏問。

史料16～18によって、この時の詳細がわかるので、以下にまとめる<sup>(19)</sup>。閏8月26日以前に宋商人孫忠の配下黄逢が大宰府に到着し、小舟にのりかえて越前敦賀津に至り、明州牒を進め、26日に陣定によってどうすべきかを討議する。その結果、30日に明州牒は進上し、黄逢は大宰府に追遣すべき、との宣旨がくだる。そして9月10日(『扶桑略記』は9日とする)に宋の牒状が到来し、奏問が行われた。原美和子氏によればこの牒状の内容は、『帥記』九月十日条に「其状無<sub>二</sub>指事<sub>一</sub>、只前使孫忠遲<sub>二</sub>歸来<sub>一</sub>心也。」とあるように日本に行ったきり二年経っても戻らない孫忠の様子をうかがう意味で送られたものか、あるいは滞在が長引くことを嫌った孫忠が明州刺史に帰国を促す文書の発行を求めて部下の黄逢を明州に派遣したため送られてきた牒であると指摘されている<sup>(20)</sup>。ただし、この時には審議の結論は出ず、翌永保元年(1081)10月に、また孫忠の帰還を促す内容の牒状がもたらされ<sup>(21)</sup>、さらに翌年の永保2年11月21日に孫忠に大江匡房起草の返牒が交付された<sup>(22)</sup>。

以上が本「牒状」到着から返牒までの経過であるが、承暦4年時点で返牒するか否か決定しなかったにも関わらず「宰府の返牒を遣はす」とあるのは疑問である。例え2年後の返牒が反映されたと考えても、諸史料を見る限り、『牒状記』下線(b)にあたる「牒状の牒、先例に叶はず」

や「蕃礼に背く」という議論がされた形跡はない。ここについては石井氏の、同年にもたらされた高麗牒状との混同がみられると<sup>(23)</sup>の指摘があるが、詳しくは述べられていないので、ここで改めて検討してみたい。石井氏の指摘される同年にもたらされた高麗牒状とは、承暦3年に高麗から大宰府に宛てて医師の派遣を要請されたものである<sup>(24)</sup>。以下に関連史料を掲げる。

史料19『朝野群載』<sup>(25)</sup>20異国 己未年（1079）11月日付高麗国礼賓省牒

高麗国礼賓省牒 大日本国大宰府

当省、伏奉<sub>レ</sub> 聖旨<sub>二</sub> 訪聞。 貴国有<sub>下</sub>能理<sub>三</sub>療風疾<sub>一</sub>医人<sub>上</sub>。今因<sub>三</sub>商客王則貞廻<sub>二</sub>皈故郷<sub>一</sub>。因<sub>レ</sub>便通<sub>レ</sub>牒。及<sub>二</sub>於王則貞処<sub>一</sub>、説<sub>三</sub>示風疾縁由<sub>一</sub>。請<sub>二</sub>彼処<sub>一</sub>。選<sub>二</sub>扨上等医人<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>来年早春<sub>一</sub>。発送到来。理<sub>三</sub>療風疾<sub>一</sub>。若見<sub>二</sub>功效<sub>一</sub>。定不<sub>二</sub>輕酬<sub>一</sub>者。今先送<sub>二</sub>花錦、及大綾、中綾、各一十段、麝香一十臍<sub>一</sub>。分<sub>二</sub>附王則貞<sub>一</sub>、賚持将<sub>レ</sub>去<sub>二</sub>知大宰府官員処<sub>一</sub>。且充<sub>二</sub>信儀<sub>一</sub>。到可<sub>二</sub>収領<sub>一</sub>者。牒具如<sub>レ</sub>前。当省所<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub> 聖旨<sub>一</sub>。備録在<sub>レ</sub>前。請 貴府若有<sub>下</sub>端的能療<sub>二</sub>風疾<sub>一</sub>好医人<sub>上</sub>。許容発送前来。仍収<sub>二</sub>領正段麝香<sub>一</sub>者。謹牒。

己未年〈当承暦三年〉十一月 日牒

少卿林檎  
生

卿崔

卿鄭

史料20『水左記』承暦四年九月四日条

四日癸巳（中略）議<sub>二</sub>定高麗返牒仰詞<sub>一</sub>也。匡房朝臣注<sub>下</sub>出牒<sub>上</sub>□<sub>状カ</sub>乖<sub>二</sub>礼度<sub>一</sub>之事<sub>上</sub>。一、牒字下不<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>上字<sub>一</sub>事。一、不<sub>レ</sub>封<sub>二</sub>函封<sub>一</sub>紙事。一、不<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>年号<sub>一</sub>注<sub>二</sub>己未<sub>一</sub>事。一、年月下唯注<sub>レ</sub>日不<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>一二<sub>一</sub>事。一、稱<sub>二</sub>聖旨<sub>一</sub>事。聖旨者宋朝所<sub>レ</sub>稱也、如本朝□<sub>二</sub>歟、非<sub>二</sub>蕃国所<sub>レ</sub>稱<sub>一</sub>。一、不<sub>レ</sub>差<sub>二</sub>使事<sub>一</sub>。（下略）

史料21『本朝統文粹』11 牒 承暦四年付大宰府返牒

日本国大宰府牒 高麗国礼賓省

却<sub>二</sub>廻方物等<sub>一</sub>事

牒。得<sub>二</sub>彼省牒<sub>一</sub>稱。（中略、史料19の牒状の引用）如<sub>レ</sub>牒者。（中略）抑牒状之詞。頗睽<sub>二</sub>故事<sub>一</sub>。改<sub>二</sub>处分<sub>一</sub>而曰<sub>二</sub>聖旨<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>蕃王可<sub>レ</sub>稱。宅<sub>二</sub>遐陬<sub>一</sub>而跨<sub>二</sub>上邦<sub>一</sub>。誠彝倫道<sub>レ</sub>敦。況亦託<sub>二</sub>商人之旅艇<sub>一</sub>。寄殊俗之単書。執圭之使不<sub>レ</sub>到。封函之礼既虧。双魚、猶難<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>鳳池之月<sub>一</sub>。扁鵲何得<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>鷄林之雲<sub>一</sub>。凡厥方物、皆從<sub>二</sub>却廻<sub>一</sub>。今以<sub>レ</sub>状牒。牒到准<sub>レ</sub>状。故牒。

承暦四年 月 日

史料19の「牒状」は「当省、伏奉<sub>二</sub>聖旨<sub>一</sub>訪聞。」という文言ではじまっている。そして返牒についての討議に際して、「牒<sub>状カ</sub>□<sub>二</sub>乖<sub>二</sub>礼度<sub>一</sub>之事」（史料20）として、史料20の二重下線部に「一、稱<sub>二</sub>聖旨<sub>一</sub>事。聖旨者宋朝所<sub>レ</sub>稱也、如本朝□<sub>二</sub>歟、非<sub>二</sub>蕃国所<sub>レ</sub>稱<sub>一</sub>。」とあるように、「聖旨」の語使用について「礼度に乖」くとして、問題になっている<sup>(26)</sup>。師茂勘例<sup>(27)</sup>によれば、10月2日に

太政官符が下され、高麗国には医師を派遣せず方物も却廻し、大宰府は高麗国に返牒すべきことなどが伝えられた。これを受けて11月3日に史料21の文面の返牒が完成し、これを大宰府に下している<sup>(28)</sup>。

以上より、『牒状記』(a) 部分は宋の牒状のこと、(b) 部分は高麗の牒状のことを指すと考えられるが、両者の対応がほぼ並行して審議されたため、『牒状記』の作成者が一括して宋の牒状のことと誤解して記述したのであろう。なお、『牒状記』に見られる宋牒状の冒頭部分は『帥記』『水左記』等の諸史料には記載されていないが、上述した元永元年の菅原勘例に、「元豊三年、宋人孫忠所<sub>レ</sub>献牒曰、大宋国明州牒<sub>二</sub>日本国<sub>一</sub>」とあり、『牒状記』に掲載されている「牒状」の文面ともほぼ一致しているので、この部分も菅原勘例を直接の典拠とした可能性が高い。

(2)『牒状記』所載「牒状」と元永元年諸勘例

前節において、『牒状記』所載の「牒状」についていくつか具体例を掲げて検討したが、元永元年に作成された勘例（以下、元永元年諸勘例）を直接の典拠としている部分が多いことが指摘できる。従って本節では、『善隣国宝記』所引の元永元年諸勘例と『牒状記』所載の勘例を比較したいと思う。

『善隣国宝記』は、『牒状記』の約1世紀後、瑞溪周鳳によって編纂され、文明2年(1470)に完成した、古代から中世の外交史・外交文書集である。同書には、『元亨釋書』をはじめ様々な書籍や文書が引用されており、上掲の師安勘例や菅原勘例等の元永元年諸勘例もその中のひとつである。

元永元年諸勘例は、『善隣国宝記』の各所に引用されている。元永元年諸勘例提出の過程と勘例の引用箇所をまとめたものが表3である。

表3 元永元年諸勘例作成過程

年月日		事項	出典史料
永久5年 (1117)	9月	宋国、商客に付して牒状を送る。	『善隣国宝記』元永元年条 ・師茂勘例(『師守記』貞治6年5月9日条)
元永元年 (1118)	3月15日	諸道博士等に、宋牒状が旧例に倣っているかどうかを調べさせる。	師茂勘例(『師守記』貞治6年5月9日条)
	4月25日	中原朝臣師安・同氏広忠・清原真人信俊・中原朝臣師遠・同氏広宗の5人、宋国の牒状について勘申する。 →師安勘例	『善隣国宝記』推古15年条・天智3年条
		また、明法博士三善信貞も勘申。	『善隣国宝記』天平勝宝6年正月条
	4月27日	式部大輔菅原在良、宋国の牒状について勘申する。 →菅原勘例	『善隣国宝記』元永元年条
	6月8日	公卿ら、宋国に答書及び方物を送るか否かを議する。牒状の書体が旧例に適わず、公家に進上する趣旨のものではないので、返牒を送らないことを決定する。	『中右記』・『百練抄』・師茂勘例・『牒状記』

師茂勘例に、「<sup>(永久)</sup>五年九月、大宋国明州牒到来、以紙褁之、銘、其上以錦褁、」とあり<sup>(29)</sup>、永久5年(1117)9月に宋から牒状が届いたことが見える。また同勘例により、翌永久6年(=元永元年)3月15日に、孫俊明・鄭清に付してもたらされた宋国の牒状に対して、紀伝・明経・明法道の諸博士ならびに菅原在良らに先例を勘申させていることが分かり<sup>(30)</sup>、表3にみえる元永元年諸勘例の作成者とも一致する。この命によって、4月25日および27日に提出されたの

〈176〉『異国牒状記』所載の「牒状」について―「文武天皇慶雲二年」の「牒状」の解釈を中心として―(窪田)

が元永元年諸勘例である。これらの勘例をもとに6月8日に審議が行われ、宋国の牒状の書体が旧例に合わないため、返牒しないことを決したのである<sup>(31)</sup>。

このような過程を経て作成された元永元年諸勘例は、長い間失われることなく伝わり、15世紀にいたって『善隣国宝記』に引用されることとなったのである。元永元年諸勘例を引用している書物は、現在知られている限りは『善隣国宝記』のみであるが、本稿では、『牒状記』も、元永元年諸勘例を典拠として書かれた可能性を指摘してみたい。

『善隣国宝記』所引の元永元年諸勘例と『牒状記』所載の勘例を比較し、まとめたものが表4である。表4を見ると『牒状記』の「牒状」と元永元年諸勘例の先例引用は、一見相違が多いように見えるが、両者の相違点は以下のように説明できる。

『牒状記』に見えて元永元年諸勘例に掲載されていない先例は、応神28年・斉明7年・延喜7年・長徳3年・寛仁3年である。これらの「牒状」は、発信元をみると、高句麗・新羅・高麗であり、全て朝鮮半島諸国からもたらされたものである。一方元永元年諸勘例は、『善隣国宝記』鳥羽天皇元永元年条に「此書、叶旧例否、命諸家勘之、四月廿七日、從四位上行式部大輔菅原在良、勘隋唐以来献本朝書例」とあることから、少なくとも菅原勘例の勘申の対象は中国のみであり、他の勘例についても同日の宣旨によって勘申が命じられているので<sup>(32)</sup>、対象は中国からもたらされた「牒状」の先例のみであったのであろう。

逆に元永元年諸勘例に記載され、『牒状記』には見えない先例は、天智3年・天平勝宝6年・承暦2年の例である。まず、天智3年の先例であるが、以下に全文を掲げる。

#### 史料22『善隣国宝記』卷上 天智三年条所引師安勘例

海外国記云曰、天智天皇三年四月、大唐客来朝、大使朝散大夫上柱国郭務棕等三十人・百濟佐平彌軍等百余人、到対馬島、遣大山中采女通信侶・僧智弁等来、喚客於別館、於是智弁問曰、有表書并献物以不、使人答曰、有將軍牒書一函并献物、乃授牒書一函於智弁等、而奏上、但献物宗棕看而不將也、

九月、大山中津守連吉祥・大乙中伊岐史博徳・僧智弁等、称筑紫太宰辞、〈實是勅旨〉、告客等、今見客等来状者、非是天子使人、百濟鎮將私使、亦復所資文牒、送上執事一私辞、是以使人不得入国、書亦不上朝廷、故客等自事者、略以言辞奏上耳、十二月、博徳、授客等牒書一函、函上著鎮西將軍、日本鎮西筑紫大將軍牒、在百濟国大唐行軍總管上、使人朝散大夫郭務宗棕等至、披覽来牒、尋省意趣、既非天子使、又無天子書、唯是總管使、乃為執事牒、牒又私意、唯須口奏、人非公使、不令入京、〈云云〉、〈此亦師安・広忠・信俊・師遠・広宗五人、同所勘也〉

この一連の出来事は『書紀』にも見える<sup>(33)</sup>が、『書紀』よりも詳細である。郭務棕らが唐の百濟鎮將劉仁願の牒状・方物を持って来朝し、そのもたらした牒状・方物の対応について書かれている。百濟鎮將（下文には「在百濟国大唐行軍總管」とある。）は、660年に滅亡した百濟に置かれた唐の駐留軍の最高責任者で、この時は劉仁願がその任に就いていた。この使者および書状は、「非是天子使人、百濟鎮將私使、亦復所資文牒、送上執事私辞」とあるように、私使であり、私

表 4 各勘例比較表

『善隣国宝記』所引元永元年諸勘例（1118）				異国牒状記（1367）			『師守記』所引中原師茂勘例（1367）		
引用年月	発信元	「牒状」文面	備考	引用年月	発信元	「牒状」文面	引用年月	発信元	「牒状」文面
				× 応神28年9月	高句麗	高麗の王日本国に教ふ	応神28年9月	高句麗	高麗王教日本国
(師) 推古12年(604)正月?	隋	皇帝問倭王 〈返〉東天皇白西皇帝	『経籍後伝記』を引用	× 推古2年(594)正月	隋	皇帝和王に問フ			
(師) 推古16年(608) (菅)	隋	(師)皇帝問倭王 〈返〉東天皇白西皇帝 (菅)皇帝問倭王	(師)は『経籍後伝記』を引用	× 推古16年(608)8月	隋	皇帝和王に問ふ 〈返〉東天王西皇帝に申ス			
				× 斉明7年(661)	高句麗	大高麗国天皇謹白大和国天皇に			
(師) 天智3年(664)	在百济国大唐行軍總管(劉仁願)	〈返〉日本鎮西筑紫大將軍牒在百济国大唐行軍總管	『海外国記』を引用。						
(菅) 天智10年(671)	唐	大唐帝敬問日本国天皇		× 天智10年(671)	唐	大唐皇帝敬問日本国天皇に			
(菅) 天武元年(672)	唐	大唐皇帝敬問倭王		× 天武元年2月(672)	唐	大唐皇帝敬て和王に問			
(菅) 年紀記載なし	唐	皇帝敬到(致)書於日本国王	「勅日本国使…大分等書」「大分」=坂合部大分(『統紀』養老2年12月15日条に帰国記事あり)	× 文武天皇慶雲2年(705)	唐	皇帝書を日本国の王に致す			
天平勝宝6年(754)正月(参考)	『統紀』同年正月丙寅条の伴古麻呂の帰国報告記事。いわゆる日本使と新羅使の席次争いとして知られている。外交文書の書式を決定する上で相手国との関係が重要となるが、三善信貞は、新羅との上下関係を明記するものとして勘例に引いたのであろうと推定されている。[田中氏編註(13)書]								
				○ 延喜7年(907)5月	新羅	記載無し			
				× 長徳3年(997)5月	高麗	記載無し	長徳3年(997)6月13日	高麗	記載無し
				○ 寛仁3年(1019)9月	高麗	記載無し			
(菅) 承暦2年(1078)	大宋国明州か?	賜日本国大宰府令藤原経平							
元豊3年(1080) (菅) * 北宋の元号日本は承暦4年	大宋国明州	大宋国明州牒日本国		○ 承暦4年(1080)9月	太宗(宋)国明州	太宗(宋)国明州牒日本国大宰府	承暦4年(1080)10月2日	高麗	記載無し



『善隣国宝記』所引元永元年諸勘例（1118）				異国牒状記（1367）			『師守記』所引中原師茂勘例（1367）		
引用年月	発信元	「牒状」文面	備考	引用年月	発信元	「牒状」文面	引用年月	発信元	「牒状」文面
(1084年以降の記載なし)				○ 承徳元年 (1097)5月	大宋国明 州	記載無し			
				× 承徳元年 (1097)9月	大宋国明 州	記載無し	承徳元年(1097) 9月・12月24日	大宋国明 州	記載無し
				× 元永元年 (1118)9月	宋(明州)	知明州軍州事	永久5年(1117)9 月・同6年(1118・ 元永元年)3月15 日・同年6月8日	大宋国明 州	記載無し
				○ 承安3年 (1173)2月	大宋国明 州	〈返〉日本国沙門静海 牒	承安2年(1172秋・ 同3年(1173)2月	大宋国明 州	大宋国明州□海制置司 牒日本国太政大臣（承 安2年秋） 〈返〉日本国沙門静海 牒大宋国明州沿海制置 王
							承安4年 (1174)2月5日	大宋国	記載無し
				× 天福2年 (1234)正月	記載無し	記載無し			
				○ 天福2年 (1234)5月	記載無し	記載無し			
				○ 仁治元年 × (1240)4月	記載無し	記載無し			
				× 文永5年 (1268)2月	記載無し	記載無し	文永5年(1268) 閏正月8日・同年 2月6日・同月28 日・同年3月27日・ 文永6年(1269) 4月26日	高麗	記載無し
				× 文永6年 (1269)12月	記載無し	記載無し			
				× 文永8年 (1271)10月	記載無し	記載無し			
				× 建治元年 (1275)5月・ 同10月・弘安 (1279)2年7月	記載無し	記載無し	建治元年(1275) 10月22日・弘安2 年(1279)6月26 日	元	記載無し
				× 正応5年 (1292)12月	高麗	記載無し	正応5年(1292)11 月12日・12月8日・ □日・16日・同6 年(1293)4月22日	元	記載無し

【凡例】

(師)：4月25日中原師安勘例 (三)：4月25日三善信貞勘例 (菅)：4月27日菅原在良勘例

信であると見なされた。

次に承暦2年の例であるが、「賜日本国大宰府令藤原経平」とあり、宛先に個人名が書かれている。この書状に対する審議が、2年後の承暦4年5月27日に行われ、この書状の文に疑いありとしていること、藤原経平が私貿易を行うことについて議論がなされている<sup>(34)</sup>。

以上の2例は発信元と宛先という違いはあるものの、個人的な書状に当たるのではないかという疑義が持たれる例である点が共通している。表4を見る限り、『牒状記』所載の「牒状」は基本的には9世紀以前は王者間、10世紀以降は地方官府間<sup>(35)</sup>による文書のやりとりを想定していると考えられるので<sup>(36)</sup>、この2例は除外されたのではないか。

天平勝宝6年の例は、『統紀』同年正月丙寅条の同伴古麻呂の帰国報告記事とほぼ同文である。これは、いわゆる日本使と新羅使の席次争いとして知られている。外交文書の書式を決定する上で相手国との関係が重要となるが、三善信貞は、新羅との上下関係を明記するものとして勘例に引いたのであろうと推定されている<sup>(37)</sup>。しかし、この時にもたらされた文書に関する記述は見られないので、『牒状記』では除外されたのであろう。

『牒状記』の「牒状」と元永元年諸勘例の先例引用は、一見相違が多いように見えるが、これらの相違点は以上のように説明できる。残る『牒状記』慶雲2年の例と、菅原勘例の年次不明の例については章を改めて検討したい。これらの例外を除外すると、両者の引用する先例は一致するのである。また、本章で行った両者の個々の「牒状」比較の結果から考えても、『牒状記』所載の、元永元年諸勘例に掲載される下限の承暦4年までの中国からもたらされた「牒状」については、元永元年諸勘例に基づいて先例の記述を行ったと言えるのではないか。

## 2 「文武天皇慶雲二年」の「唐牒状」について

本章では、慶雲2年(705)に唐からもたらされたという「牒状」について検討したい。この「牒状」をめぐるのは、『総合年表』の養老2年(718)12月13日の項に「この頃、大宝2年(702)入唐の遣唐大使坂合部大分、「皇帝敬致書日本国王」云々に始まる唐皇帝の勅書を進める(善隣国宝記/異国牒状記)」とある。

しかしながら、『牒状記』に養老2年と明記された「牒状」は存在しないので、『総合年表』の出典部分に記されている「異国牒状記」は、「文武天皇慶雲二年」の「牒状」を指しているものと考えられる。そしてもう一つの出典史料とされる『善隣国宝記』は、前章で保留とした、菅原勘例の年次不明の例に当たる。すなわち『総合年表』によれば両者は同一のもので、しかも養老2年にもたらされたものと解釈しているが、その解釈に到った過程は不明である<sup>(38)</sup>。以下、この点について検討してみたい。

まずは『牒状記』の該当部分を掲げる。

### 史料23『牒状記』

文武天皇慶雲二年、唐牒状にいはく、「皇帝書を日本国の王に致す」と書く。返牒なし。

他の史料によって慶雲2年に唐使が来朝または、遣唐使が帰国した記事は見られない。参考までに、同年の外交関係史料を掲げれば、以下の通りである。

史料24『統紀』慶雲二年五月癸卯条

癸卯。幡文造通等自新羅至。

とあって、前年10月に任命された遣新羅使が帰朝する。

史料25『統紀』慶雲二年八月戊午条

八月戊午。(中略)又授遣唐使栗田朝臣真人従三位。其使下人等、進位賜物各有差。  
(下略)

とあるごとく、前年に帰国した大宝度の遣唐使、栗田真人に従三位が授けられる。その他の遣唐使人にも位を進め、物を賜わっている。

史料26『統紀』慶雲二年十月丙子条

丙子。新羅貢調使一吉浪金儒吉等来献。

史料27『統紀』慶雲三年一月丁亥条

丁亥。金儒吉等還蕃。賜其王勅書曰。天皇敬問新羅王。(下略)

新羅貢調使一吉浪金儒吉・薩浪金今古らが来朝する。11月13日に新羅使を迎えるため諸国の騎兵を徴発し、紀古麻呂を騎兵大將軍とし<sup>(39)</sup>、12月27日に入京している<sup>(40)</sup>。また、史料27によれば、帰国の際に「天皇敬問新羅王」という、新羅国王宛の慰労詔書を付した。

以上の史料から考えられるのは、前章に見られたような、承暦4年に宋と高麗を混同したことと同じく、史料26・27に見える、新羅使の来朝から翌年新羅王への慰労詔書授与までのことと混同した、という可能性である。『統紀』には国書冒頭の文面が記されているが(史料27下線部)、これは文武天皇が新羅王に宛てたものである。しかし、『牒状記』所載の「牒状」はあくまでも外国からもたらされた「牒状」について先例を挙げているので、少なくとも『統紀』の史料27のこととは考えられない。

次に菅原勘例の該当部分を提示する。

史料28『善隣国宝記』卷上 元永元年条所引菅原勘例

(上略)又大唐皇帝勅日本国衛尉寺少卿大分等書曰、皇帝敬到書於日本国王<sup>[致]</sup>。(下略)  
ここに見える「日本国衛尉寺少卿大分」に関して、以下の史料が注目できる。

史料29『統紀』養老二年十二月甲戌条

甲戌。進<sub>レ</sub>節刀<sub>一</sub>。此度使人略無<sub>二</sub>闕亡<sub>一</sub>、前年大使從五位上坂合部宿祢大分、亦隨而來歸。

史料29より、「日本国衛尉寺少卿大分」は大宝度の遣唐大使として入唐し、養老2年(718)に帰国した「前年大使從五位上坂合部宿祢大分」(波線部)のことであり、「此度使人」つまり、靈龜2年(716)に派遣された多治比県守を大使とする遣唐使と一緒に帰国したことが分かる。従って史料28の書は養老2年にもたらされたと考えられている<sup>(41)</sup>。

もう一つ、8世紀に唐から日本へもたらされた国書で、全文が残っている例がある。

史料30「勅日本国王書」(『唐丞相曲江張先生文集』卷7 所収)

勅日本国王主明樂美御德。(中略)丹墀真人広成等入朝東歸。(中略)一船漂入南海。即朝臣名代。艱虞備至。性命僅存。(中略)今朝臣名代還。一一口具。遣書指不多及。

「丹墀真人広成」は、天平4年(732)に遣唐大使に任命され、天平6年(734)に帰国した多治比真人広成<sup>(42)</sup>であり、この時の副使が「朝臣名代」、つまり中臣名代である。史料30の結語に「今朝臣名代還。・・・遣書指不多及。」とあることから、中臣名代帰国の際にこの勅書が託されたことが分かる。なお、中臣名代帰朝は天平8年(736)8月<sup>(43)</sup>であるので、この勅書も天平8年にもたらされたと推定できる。

史料30「勅日本国王書」は『牒状記』と冒頭部分が一致せず、書の形式も異なっているので<sup>(44)</sup>、この勅書を指す可能性は低い。一方、史料28の菅原勘例は「敬」を除いて一致する<sup>(45)</sup>。

前章で『牒状記』の承暦4年以前に中国からもたらされた「牒状」については、元永元年の諸勘例に基づいて先例の記述を行ったことを指摘した。表4の先例引用の順番から見ても、当該国書も元永元年の菅原勘例を直接の典拠とした可能性が高い。従って、両者は同一の「牒状」と考え、菅原勘例の「大唐皇帝勅日本国衛尉寺少卿大分等書」という記述により、養老2年に坂合部大分がもたらしたものとする『総合年表』の解釈は妥当ということになる。

では「文武天皇慶雲二年」と記載したのはなぜかということ、最後に考えたいと思う。わざわざ「文武天皇慶雲二年」(養老2年は元正天皇)と書いていることから、表2のNo.8で例あげた延喜7年を延長7年と誤って記載したごとく、単純に慶雲と養老を書き違えたとは考えられない。改めて菅原勘例(史料28)を見てみると、元永元年の他の先例と違い、唯一年紀の記載がない。これに対して、『牒状記』は例外なく、最初に「牒状」がもたらされた年(月)が書かれている。よって、元永元年諸勘例以外の史料を参考にして年次を確定する必要があったのである。

ここで注目すべきは史料25で、遣唐使粟田真人に叙位が行われている点である。先にも述べたが、坂合部大分は大宝度の遣唐大使<sup>(46)</sup>である。粟田真人も同じ大宝度の遣唐使で、しかも最高責任者の執節使であった。粟田真人の唐からの帰国は史料25の前年、慶雲元年である<sup>(47)</sup>。つまり、坂合部大分と粟田真人は入唐時期は同じであるが、帰国時期が違うということにこの問題のポイントがあるのではないか。

この問題を考える時に参考になるのは、上掲史料30に示した天平度の遣唐使の場合である。上

述のように、大使多治比広成は天平6年に帰国したが、副使中臣名代は崑崙まで流され、2年後の天平8年に帰国している。この時、副使中臣名代に託された唐皇帝の国書が史料30であるが、大使多治比広成も帰国時に国書を持ち帰ったことが想定され、天平度の遣唐使は、結果として2通の国書をもたらしたと考えられる。このことは、本件と同一の経緯であることが惹起される。すなわち、大宝度の遣唐使は慶雲元年に執節使の粟田真人が帰国し、坂合部大分の帰国が養老2年であったことは上述したとおりである。大分の帰国が遅れた事情は、名代の件のように明らかではないが、菅原勘例や『牒状記』により大分が国書を持ち帰ったことは明らかであり、大宝度の遣唐使も結果として2通の国書がもたらされた可能性が高い。『牒状記』は基本的には1回の使節には1通の「牒状」がもたらされたという理解に見受けられる。真人の帰国は慶雲元年であり、おそらく国書の奏上も同年であろう。一方大分の帰国は養老2年であり、この時もたらされた国書と真人がもたらした国書との錯簡があったと思量される。つまり、あくまでも推測の域を出ないが、慶雲元年の「慶雲」と養老2年の「二年」が錯誤により合成されたと考えられるのではなかろうか。『牒状記』では前章で検討した、推古2年と同16年のケースや天智10年と天武元年のケースが1回の来朝・1通の国書であったのにも関わらず、それぞれ2回と見なしている例から考えても、このような錯誤が想定できる。

## おわりに

本稿では、『異国牒状記』に先例として記載された「牒状」について検討した。改めて指摘した点を要約すれば以下のとおりである。

第1に、『牒状記』所載の「牒状」については、他の諸史料によっても、そのもたらされた経緯が確認できる場合がほとんどであり、その対応関係は表2のごとくである。

第2に、『牒状記』所載の、承暦4年までの中国からもたらされた「牒状」は元永元年に作成された諸勘例を直接の典拠とした可能性が極めて高い。

第3に、『牒状記』に記載される「文武天皇慶雲二年」にもたらされたとされる唐からの「牒状」は、養老2年、坂合部大分が帰国した際に持ち帰ったものであると考えるのが妥当である。それにもかかわらず『牒状記』が「文武天皇慶雲二年」と記載したのは、典拠とした菅原在良勘例に年記の記載が無い、粟田真人が唐より帰国した慶雲元年の「慶雲」と坂合部大分の帰国した養老2年の「二年」が錯誤により合成されたと推測できる。

最後に、承暦4年以降の典拠や朝鮮半島からの「牒状」に関する典拠について少し触れておきたい。『続日本後紀』に「權中納言從三位兼行左兵衛督陸奥出羽按察使藤原朝臣良房召内記。賜大唐勅書。令以藏之。」<sup>(48)</sup>とあり、唐からの国書は内記の蔵で保管したことがわかる。また、第1章で述べた承暦4年高麗の医師派遣要請の返牒において、長徳・承平・天慶・永承の返牒を引載して審議しているなど<sup>(49)</sup>、返牒そのもの、ないしは元永元年諸勘例のように牒状の内容を引用し、列記したものを参照していた様子がうかがえる。

「はじめに」で『牒状記』は官務小槻兼治の勘例を参考に書かれたことを記した。そこで、官務小槻兼治がどのような書籍や文書を見ることができたかということに焦点を当てて、『牒状記』

所載の「牒状」の典拠について考えたい。官務小槻氏については橋本義彦氏により詳細な研究がされているので、橋本氏の研究に依って以下に述べたい<sup>(50)</sup>。官務とは、太政官の史の最上首であり、外記の最上首である局務と併称される。太政官の左右両弁官局では、平安時代中期以降最上首の左大史が五位に任じられて「大夫史」と称され、左右大少史以下の官人を統轄して官中の庶務を掌握するようになり、その職掌は官文書を管領して先例を勘申することであった。平安時代中ごろから算道の小槻氏が大夫史ないし官務を世襲し、鎌倉時代以降は同氏が広房流（大宮）と隆職流（壬生）に分かれて官務職を争ったが、戦国時代大宮官務家が断絶したため、以後江戸時代末まで壬生家が独占して官務を世襲した。

太政官には官文殿が置かれ、宣旨・官符の案文や朝儀・公事の記録などを保管していたが、上述のように官務の職掌は官文書の管領であったので、官文殿の管理も官務の前身である大夫史が文殿別当として厳重に行っていた。大夫史が小槻氏に世襲されるにともない、同氏の文庫に官文書が混入して漸次官務文書を形成し、天養元年（1144）には小槻政重が、「官文書」は「継家奉公之者」が厳重に相伝すべきことを起請するに至った<sup>(51)</sup>。その後嘉禄2年（1226）官文殿が焼亡し、累代の文書がことごとく焼失すると<sup>(52)</sup>、官務小槻家の文庫は「弥以私家之文書可為公務之明鏡」<sup>(53)</sup>とされて重んじられるようになった。現在は「壬生家文書」として宮内庁書陵部と一部、京都大学に蔵されている。

以上のように、小槻家は官文書を保管していたことが知られ、「壬生家文書」にも外交文書として「咸和十一年（841）閏九月廿五日渤海国中台省牒案」<sup>(54)</sup>、勅例として「万寿三年（1026）五月九日大外記清原頼隆勘例写」<sup>(55)</sup>などが現存している。また、現存する以外にも、宝亀9年に来日した唐使への応接をめぐって石上宅嗣と文書作成者「余」との意見対立を記した文書が知られる<sup>(56)</sup>など、現在は失われた過去の勅例や上述した唐の国書、長徳・承平・天慶・永承の牒状のような公文書も、『牒状記』が作成された14世紀当時は蔵していた可能性もあるが、ここでは指摘するに留め、詳しくは今後の課題としたい。

なお、本稿は東アジア世界史研究センターの研究成果の一環である。本センターホームページにて公開している「古代東アジア世界史年表」（<http://www.senshu-u.ac.jp/~off1024/>）作成にあたって『牒状記』の「文武天皇慶雲二年」の記載に関する取り扱いについて疑問を抱いたことに端を発して執筆したものである。従って、「古代東アジア世界史年表」には本稿の検討結果を反映させて、718年（養老2）12月の項の出典史料として『牒状記』を掲載することとする。

#### 註

- （1）写本や版本によっては『異国牒状事』と題しているものもあるが、本稿では『異国牒状記』の表記に統一する。
- （2）『牒状記』では、外国からもたらされた文書をすべて「牒」「牒状」と記載しているが、『牒状記』所載の文書を見ると、実際には詔（いわゆる慰勞詔（制）書）や致書等の形式である場合もある。牒は養老公式令牒式に「右内外官人主典以上。縁事申牒諸司式。」とあるように、本来は内外の主典以上の官人個人が諸司に対して上申する場合に使用される文書である。しかし、『令集解』公式令解式の令釈に「檢唐令。…尚書省下省内諸司。為故牒也。」とあることから、下達文書としての牒もあったことが知られるなど、広い用途を有する文書であることが中村裕一氏によって指摘されている。（中村裕一『唐代官文書研究』中文



出版社 1991) さらに高橋公明氏は十三世紀後半から十五世紀前半には外交文書全般を「牒」と呼ぶことが一般的であったとの見解も示されている(高橋公明「外交文書を異国牒状と呼ぶこと」『文学』6(6) 2005)。従って本稿もこれらの見解に従い、実際には牒ではない文書形式であっても、「牒」「牒状」と表記する。

- (3) 和田英松『弘安文禄 征戦偉績』(富山房 1905)
- (4) 第6編28 (1935) 所収。
- (5) この他、張東翼氏の『日本古中世高麗資料研究』(韓国 SUN プレス 2004) にも収録され、韓国語に訳されている。
- (6) 論文としては、渡邊誠「平安貴族の対外意識と異国牒状問題」(『歴史学研究』823 2007)、近藤剛「嘉禄・安貞期(高麗高宗代)の日本・高麗交渉について」(『朝鮮学報』207 2008)、朱雀信城「至元八年九月二十五日付趙良弼書状について」(『太宰府学』2 2008)、山崎覚士「書簡からみた宋代明州対日外交」(『東アジア世界史研究センター年報』3 2009) など、年表では、田島公「日本、中国・朝鮮対外交流史年表」(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『貿易陶磁一奈良・平安の中国陶磁一』臨川書店 1993)、対外関係史総合年表編集委員会編『対外関係史総合年表』(吉川弘文館 1999) などが『牒状記』所載の「牒状」を史料として取り扱っている。
- (7) 石井正敏「『異国牒状記』の基礎的研究」(『紀要』史学54(中央大学文学部) 2009) また、「貞治六年の高麗使と高麗牒状について」(『紀要』史学55(中央大学文学部) 2010) で『牒状記』の記述を主眼において貞治6年の高麗使およびそのもたらした牒状について新たな見解を述べられている。
- (8) 石井氏註(7) 論文によれば、これは貞治6年当時のもので、天皇に献上するために作成されたが、清書のつもりが本文の大きな脱文補入ができてしまったため、別に清書を作成し、結果草案となったものであろうと指摘されている。
- (9) 石井氏註(7) 論文によれば、前田本の江戸時代以前の写本を近世に転写したものとされる。
- (10) 石井氏註(7) 論文によれば、東大本を大正13年(1924)に写したものであるとする。
- (11) 註(6) 参照。
- (12) 石井氏註(7) 論文の釈文による。なお、原文は仮名書きであるが、釈文作成にあたって、「読みやすいよう仮名を漢字に改め、句読点を打ち、カタカナのハ・二等は平仮名に改め、濁点を付し」、「漢字に原文に無い助詞などを補う場合はカタカナを用い」ている。
- (13) 田中健夫編『訳注日本史料 善隣国宝記・新訂統善隣国宝記』(集英社 1995) 頭註。
- (14) 『政事要略』卷二十五 年中行事 十一月朔日御曆奏条にも「儒伝云、以小治田朝十二年歳次甲子正月戊申[戊]朔、始用曆日」とある。
- (15) 『善隣国宝記』卷上 推古十五年条に、「推古記〔紀〕・太子伝所記、妹子入隋、及推古十五年丁卯也、然書籍後伝記曰十二年甲子、又倭皇作倭王、孰是」とある。
- (16) 鈴木靖民「百済救援の役後の日唐交渉」(坂本太郎博士古稀記念会編『続日本古代史論集』上 吉川弘文館 1972)、堀敏一「日本と隋・唐両王朝との間に交わされた国書」(同著『律令制と東アジアー私の中国史学(二)』汲古書院 1994)、前掲註(13) 書など。
- (17) 松田好弘「天智朝の外交について」(『立命館文学』415~417 1980)、直木孝次郎「近江朝廷末年における日唐関係」(同著『古代日本と朝鮮・中国』講談社学術文庫 1988) など。
- (18) 堀氏前掲註(16) 論文、田中氏編前掲註(13) 書。
- (19) この経過については原美和子「成尋の入宋と宋商人」(『古代文化』44(1) 1992) に詳しい。
- (20) 原氏前掲註(19) 論文。
- (21) 『帥記』永保元年十月二十五日条。
- (22) 『百練抄』永保二年十一月二十一日条。
- (23) 石井氏註(7) 論文の註(25) に指摘されている。

- (24) なお、この高麗国による医師派遣要請の経緯や顛末・評価をめぐっては、奥村周司「医師要請事件にみる高麗文宗期の対日姿勢」(『朝鮮学報』117 1985)、田島公「海外との交渉」(橋本義彦編『古文書の語る日本史 2 平安』筑摩書房 1991)、渡邊氏註(6)論文など、多くの研究がある。
- (25) 高田義人氏によれば、『朝野群載』は後陽成天皇所持本系統と三条西古本系統が存在するが、現在主なテキストとして使用されている新訂増補国史大系本『朝野群載』は三条西古本系統の情報があまり反映されておらず、字句については再校訂の余地がある、と指摘されている(高田義人『『朝野群載』写本系統についての試論—慶長写本・東山御文庫本・三条西本・葉室本を中心として—』『書陵部紀要』54 2003)。本稿では、国史大系本の他に、前掲註(24)諸論文の字句を参考とした。全文については字句の異同のある可能性があるが、本稿で問題としている「聖旨」の語句については、後述するように、『水左記』や『帥記』でも取り上げられているので、この語句に関しては異同はないものとする。
- (26) 『帥記』同日条にも議論の記事がある。
- (27) 『師守記』貞治六年五月九日条所引。これによれば、「承暦四年十月二日賜官府於大宰府云、右大臣宣、奉勅、所請医人、輒難差遣、所送方物、宜被返却、早以府司之返牒、扱使者發遣、但至商人王則貞者、宜任法罪科(云々)、今度牒違旧儀筆札之間、乖蕃礼、仍無返牒事」とある。
- (28) 『水左記』承暦四年十一月三日条。
- (29) 『善隣国宝記』巻上 元永元年条によれば、「宋国附商客孫俊明・鄭清等書曰、矧爾東夷之長…宜敢事大之誠(云云)」、とある。
- (30) 師茂勘例には「同(永久)六年三月十五日右大臣少外記広安、被下 宣旨、是大宋国所付孫俊明・鄭清等之兩箇書、言上之趣、頗似有故、相叶先例否、今紀伝・明経・明法道等博士(并)式部大輔在良朝臣勘申事也」とある。
- (31) 『牒狀記』には、「元永元年九月、宋朝牒狀到来。其状にいはいく、「知明州軍州事」云々。諸道勘文に及ぶ。書ノ牒先例に背く上、公家に進ずる趣きなき由沙汰ありて、返牒なし。」とあり、元永元年9月に牒狀が到来したこととしているが、他史料で元永元年9月に牒狀が到着したことは確認できない。今回の牒狀は、永久5年9月にもたらされ、審議は翌元永元年まで及んだので、両者の年と月を混同した可能性が高い。諸道勘文に及んだことや、師茂勘例の元永元年6月8日審議の際に「無進公家之趣」とあり、『牒狀記』の下線部とも対応が一致していることから、同一事項のことと見て間違いないと思われる。なお、『善隣国宝記』の孫俊明・鄭清らのもたらした書には、「矧爾東夷之長…宜敢事大之誠(云云)」とあり、『牒狀記』の「知明州軍州事云々」と書の内容が一致しないことに関しては、山崎氏前掲註(6)論文によれば、前掲註(30)史料に「兩箇書」とあることから、前者が日本への国書・後者が明州牒狀であり、2通もたらされたと考えられている。
- (32) 前掲註(30)史料参照。
- (33) 『書紀』天智三年五月甲子条・十月乙亥朔条、戊寅条・十二月乙酉条。
- (34) 『帥記』承暦四年五月二十七日条。
- (35) 宋代には王者間の外交と地方官府間の外交が存在し、当時の日宋間では王者外交がほとんど見られず、代わって各国の地方官府が互に外交を担っていたことが山崎氏註(6)論文によって指摘されている。また、高橋氏註(2)論文によれば、10世紀はじめ～13世紀前半を国家首長間での外交文書のやりとりが表舞台から退き、その結果、主要な外交文書が、国家機関(外交文書上では大宰府)でやりとりされる牒となる、と指摘されている。
- (36) 承安3年(1173)の例は、「日本国沙門静海」が返牒を発信しているが、これは平清盛のことである。ただし、師茂勘例によると、「承安二年秋宋朝牒狀到来、状稱、大宋国明州□海制置使司牒日本国太政大臣、献方物於□□又送太政大臣」とあり、牒狀の宛先は清盛ではなく、あくまでも太政大臣である。清盛は仁安2年(1166)2月に太政大臣となったがほどなく辞し、承安2年・3年当時太政大臣は空席であった。

- (37) 田中氏編前掲註(13)書。
- (38) 田島氏註(6)年表では、養老2年12月15日の項に、「遣唐押使、節刀を返す。…また、前回の大宝二年に入唐した副使坂合部大分らも帰国する。(『統紀』)…」とし、出典は『続日本紀』のみを取り上げ、大分が書をもたらしたことについては記載していない。また、田中健夫・石井正敏「古代日中関係編年史料稿」(茂在寅男・西嶋定生・田中健夫・石井正敏『遣唐使研究と史料』東海大学出版会 1987)では、養老2年12月15日のこととして、「十五日、節刀を返進する。大宝二年入唐の遣唐大使坂合部大分…帰国。坂合部大分、唐皇帝の勅書を齎らす。」と記載し、『善隣国宝記』を出典として掲げるものの、『牒状記』は出典史料として記載されていない。ただ、補遺に慶雲元年10月9日の条のこととして『牒状記』を掲載している。そこには「文武天皇慶雲<sup>〔元カ〕</sup>二年…」とあり、慶雲元年の誤りであるか、と推測している。さらに補注により「或は養老二年の誤伝であろうか。」とも指摘しているが、断定はされていない。
- (39) 『統紀』同年十一月己丑条。
- (40) 『統紀』同年十二月癸酉条。
- (41) 鈴木氏前掲註(16)論文、田中氏編前掲註(13)書、森公章「大宝度の遣唐使とその意義」(同著『遣唐使と古代日本の対外政策』吉川弘文館 2008 初出2005)など。ただし山田英雄氏は慶雲元年の栗田真人帰国の時にもたらしたものであるとの見解である。(山田英雄「日・唐・羅・渤海の国書について」同著『日本古代史論攷』岩波書店 1987 初出1974)
- (42) 『統紀』天平六年十一月丁丑条。
- (43) 『統紀』天平八年八月庚午条。
- (44) 中村裕一「慰勞制書と「致書」文書」(同著『唐代制勅研究』汲古書院1991 初出1986)によれば、唐の国書形式として①「皇帝(敬)問某」にはじまる慰勞制書(璽書・勅書とも称す)②「勅某」にはじまる論事勅書、③「致書」の形式があると指摘されている。①②は皇帝が臣僚に下す文書形式で、②は①より劣る相手に出すとされる。③「致書」は対等関係を示す国家間の文書であり、また、君臣関係がない場合にも用いられるとされる。この分類に従うと、史料30「勅日本国王書」は②論事勅書に、『牒状記』は③「致書」の形式に当たると考えられる。
- (45) 当然のことながら国書形式も『牒状記』と同じ③「致書」の形式に当たると考えられる。また、中村氏の分類を踏まえて、森公章氏は、坂合部大分に付した国書が「致書」であるのは、8世紀はじめには絶域たる日本の扱いは未定であるので君臣関係を示さない形式をとったのであろうと解釈されている(森公章「日本古代における対唐観の研究―「対等外交」と国書問題を中心に―」同著『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館 1998 初出1988)。
- (46) 任命されたときは副使。大使は高橋笠間であったが、渡唐しなかった。
- (47) 『統紀』慶雲元年七月甲申朔条(帰国記事)・同年十月辛酉条(拝朝記事)。
- (48) 『続日本後紀』承和六年九月丙申条。
- (49) 『帥記』承暦四年九月二日条。なお、9月4日にも諸卿により返牒についての審議が行われているが、前掲史料20『水左記』承暦四年九月四日条にも「長徳三年符云」、「永承六年金州返牒云」とあり、過去の返牒を引用して審議がなされている。
- (50) 橋本義彦「官務家小槻氏の成立とその性格」(同著『平安貴族社会の研究』吉川弘文館 1975 初出1959)
- (51) 『壬生家文書』1(『図書寮叢刊』)所収「文永十年小槻有家起請文」
- (52) 『百練抄』嘉禄二年八月二十七日条、『明月記』同日条など。
- (53) 前掲註(51)史料。
- (54) 『壬生家文書』6(『図書寮叢刊』)所収。
- (55) 『壬生家文書』9(『図書寮叢刊』)所収。宇佐八幡宮怪異の祈祷に関する先例として、長保5年(1004)の例を勘申している。

(56)「石上宅嗣補伝」(『栗里先生雜著』8)所収大沢清臣所藏壬生官務家文書。この文書は現在所在不明とされ、その伝来・真偽等も不明である(田島公「日本の律令国家の「賓礼」」『史林』68(3)1985)。文書作成者の「余」については、式部卿藤原是公(田島氏前掲論文)・参議治部卿藤原家依(新日本古典文学大系『続日本紀5』補注35-57)が可能性として指摘されている。

[付記] 本稿は、2010年6月13日に國學院大學で行われた国史学会大会において報告した内容をもとに成稿したものである。当日は会場から大変貴重なご意見・ご指摘を賜った。心より御礼申し上げます。